

注意!
読めばあなたも必ず嵌まる

『セブン』『パニック・ルーム』
デビッド・フィンチャー監督がしかける知的迷宮

マーク ラファロ
ジェイク キレンホール
ロバート ダウニー Jr.

HER > 9 J ^ V P > I O L T G O O
N 9 + B φ ■ O □ D W Y · < ▣ K ㊦ ⊕
B < ㊦ ⊕ M + u z G w φ ⊕ L ■ ⊕ H J
S 9 9 Δ ^ J ▲ ▣ V O 9 O + + R K ⊕
□ Δ M + ⊕ ⊥ τ ⊕ I ● F P + P O X /
9 ▲ R ^ F J O - ▣ ▣ C ■ F > ⊕ D φ
■ ● + K ⊕ ▣ ㊦ ⊕ U ⊕ X G V · ⊕ L I
φ G ⊕ J ㊦ τ ■ O + □ N Y ⊕ + □ L Δ
⊕ < M + B + Z R ⊕ F B > X A ⊕ ● K
- ⊕ J U V + ^ J + O 9 Δ < F B < -
U + R / ● ⊕ E I D Y B 9 B T M K O
● < ⊕ J R J I ▣ ● T ● M · + P B F
⊕ ⊕ Δ S Y ■ + N I ● F B > φ ㊦ ▲ R
J G F N ^ ㊦ ● ● B · ⊕ V ● ⊥ + +
Y B X ⊕ ▣ E ● Δ C E > V U Z ● - +
I ⊕ · ⊕ ⊕ B K φ O 9 ^ · ㊦ M ⊕ G ●
R > T + L ● ● C < + F J W B I ⊕ L
+ + ⊕ W C ⊕ W ⊕ O S H T / φ ⊕ 9
I F X ⊕ W < Δ ⊥ □ Y O B ▣ - C ⊕
> M D H N 9 X S Z O ▲ A I K ㊦ +

『セブン』『パニック・ルーム』監督
デビッド・フィンチャー作品

ZODIAC

ゾディアック

PHOENIX
www.zodiac-movie.jp

DIRECTOR
デビッド・フィンチャー
(『セブン』『ファイト・クラブ』『パニック・ルーム』)
この映画の製作にあたり、徹底したリサーチを重ねたフィンチャーは、なんと撮影中に事件の新たな証拠を見つけ、警察に届け出た。フィンチャー曰く、「僕は、『セブン』をもう1本作る気なんかなかった。これは、連続殺人犯の映画ではなく、犠牲を払って真実を知ろうとする男たちの執念の物語なんだ。たとえば、アラン・J・バクラの『大統領の陰謀』みたいな」

世界が嵌まるゾディアック事件

- **世界が嵌まる、その異常性**
 - マスコミが勝手に自分に名前を付ける事を許さず、自ら「ゾディアック」と名乗った。
 - 黒ずくめの衣装に肩まで隠れる箱形の黒頭巾という姿で、白昼堂々カップルの殺害を行った。
 - 身代金の要求などではなく、既に犯した殺人に関しての犯行声明文と暗号文を新聞社に送りつけ、それを第一面に掲載しなければ大量殺人を遂行するという脅迫と「暗号を解いて俺を捕まえてみる」という挑発を行った。
 - カリフォルニアの3つの警察が依然捜査中! 目撃者や有力な容疑者が存在しながら事件は「未解決」。そして「未だ解読されていないふたつの暗号文」が存在する……。そして、事件に携わった人間の人生がことごとく破壊されていく!
- **ゾディアックの模倣犯(=フォロワー)たちが世界中を震撼!**
 - **76~77年 NY サムの息子事件**
「サムの息子(Son of Som)」という名で警察に挑戦的メッセージを送りつけたデビッド・ヴァーコウィッツ。多数のカップル殺害と2,000件の放火により悪役365年。
 - **74年 カンザス州 BTKキラー事件**
74年から殺害を開始、自らBTK絞殺魔(Bind縛る、Torture拷問する、Killer殺人者の略)と名乗り地元TVに小包や手紙を送りつけた。なりを潜めていたが、04年になっていきなり再びマスコミを挑発する声明文を送りつけるも、それがもつて05年に逮捕。
 - **90年代 日本のとある事件**
- **映画業界も「ゾディアック」に取り憑かれた!**
71年公開の「ダーティー・ハリー」に出演する殺人鬼(=サンゾリ)のモデルはゾディアックだった。ちなみに、「自己顕示欲が強いと思われる犯人は自分が主人公とされるこの映画を観にくるに違いない」とアンケート用紙を用意し、投入箱の中に警察官が潜んでいたという。その他ゾディアックを扱った映画は、05年だけで「The Zodiac」「Zodiac Killer」「The Zodiac Killer」と3本あり、その他にもこれまでおびただしい数の映画が公開されている。

「この映画を観た誰かが、あるいは本を読んだ誰かが、暗号文を解読してゾディアックの言葉を解明し、その名前と所在を我々に告げてくれることを、私は今でも期待している」——ロバート・グレイスマス(原作者)

監督: デビッド・フィンチャー(『セブン』『ファイト・クラブ』『パニック・ルーム』)
キャスト: ジェイク・キレンホール(『ブローバック』『マウンテン』『デア・アフター・トゥモロー』) / マーク・ラファロ / ロバート・ダウニー Jr.

www.zodiac-movie.jp

6月16日(土)ロードショー
特別鑑賞券(一般 ¥1300)発売中
※一部劇場を除く

丸の内プラザール	新宿ジョイシネマ	渋谷シネパレス	池袋HUMAXシネマ	MOVIX 亀有
03(3214)3366	03(3209)6180	03(3461)3534	03(5979)1662	03(5629)7200
T・ジョイ大泉	品川プリンスシネマ	シネマメディアージュ	MOVIX 昭島	109シネマズ有明
03(5933)0147	03(5421)1113	03(5531)7878	042(500)5900	0570(012)109
MOVIX 本牧	109シネマズMM横浜	109シネマズ川崎	川崎チネッタ	MOVIX 柏の葉
045(625)4766	045(664)0109	0570(007)109	044(223)3190	04(7135)6900

wb@wbfp.jp
携帯公式サイト
ムービー大量配信中!
QRコードなら入力不要
で簡単アクセス!

"ゾディアック事件"を担当する
サンフランシスコ市警の刑事
...
デイブ・トースキー 刑事
(マーク・ラファロ)

トースキー刑事の相棒
...
**ウィリアム・
アームストロング** 刑事
(アンソニー・エドワーズ)

サンフランシスコ・クロニクル紙
の風刺漫画家
...
ロバート・グレイスマス
(ジェイク・ギレンホール/
05年アカデミー賞候補
「ブロードバック・マウンテン」)

サンフランシスコ・クロニクル紙
の敏腕記者
...
ポール・エイブリー
(ロバート・ダウニー Jr.)

「俺は人を殺すのが好きだ」

カリフォルニアを震撼させた全米犯罪史上初の劇場型連続殺人事件。
奇妙な暗号で世界を挑発した犯人は、「ゾディアック」と名乗った。

湖の底に沈む緊張。真実は人の手によって遠回りする。

■菊地凛子(俳優)

フィンチャーは現代でもっとも気になっている監督の一人です。

絵作りがいい、おしゃれだし(家具の選び方とか)、でもそれだけではなくそこに人間の狂気が潜んでいるところが凄い!

■井上三太(漫画家「TOKYO TRIBE 2」「隣人13号」)

ストーリー、映画自体の色合いとか雰囲気とか、凄く良かった。事件を捜査する人たちが

どんどのめり込んでいく様子が生々しく描かれています。退屈せずに観られるので、**確実に劇場で観るのをお勧めします。**

■藤原ヒロシ

《実在の未解決殺人事件》というテーマに正攻法で挑んだデビッド・フィンチャー監督の凄みすら漂う新境地。

緻密なストーリー展開と鬼気迫る役者達の演技で、**観る者から時間の感覚を奪い去る**、「魔術的」雰囲気を持った傑作。

■エル・ジャポン

その暗号を解いてはいけない。その男を追ってはいけない。
追えばあなたも必ず嵌まる。

新聞社に送りつけられた犯行声明。新聞の一面に掲載させ読者の目を釘付けにした暗号文。捜査陣を挑発し、記者たちを翻弄しつづけた何通もの手紙——誰もが連続殺人犯「ゾディアック」の発するメッセージに吸い寄せられ、犯行予告に脅え、そして謎解きに熱中した——。

実在する「ゾディアック事件」をもとに、「セブン」のデビッド・フィンチャー監督が突きつける、今なお継続中の謎。「ゾディアック」——それは、近づけば必ず嵌まる、あまり

このうえなく贅沢な2時間37分。観客がもう一人の登場人物になって謎を追うという、サスペンスの醍醐味を120%満足させてくれる。

■TV station

劇場の中心で「私にも紙とペンを!」と叫びたくなる……。フィンチャーが機重にも仕掛けた“暗号”から目が離せません!!

■TV Taro

人が狂っていく様をジックリ見られる映画。フィンチャーの作品ではダントツに面白い。

■MOVIEびあ

追う者に憑依することで追われる者に同化し、ついにはゾディアックそのものになってしまったとでもいう様な、奇妙な魅力を持った映画。

■STUDIO VOICE

背筋の凍るオープニングから息をするのを忘れる緊張感が続く。世間を欺いて喜んでいる愉快犯ゾディアック。これが実話だから一層怖い。

この犯罪者に取り憑かれた4人の男たちの人間ドラマも秀逸で、ハードボイルドでむせかえる様な**男臭さがたまらない。**

■マリ・クレール

にも危険な冒。真実を知りたい。その欲求は恐ろしいまでに伝播する。

ここに描かれるのは、ゾディアックにかかり、その謎に魅入られて、人生を狂わされていった4人の男たちだ。“ゲーム”の舞台となった新聞社でトップを走る敏腕記者、暗号の解読に取り憑かれた風刺漫画家、そして、ゾディアック事件の最前線に立ち、全米の注目を集めることになったサンフランシスコ市警のふたりの刑事——。

真実を知りたい、謎を解き明かしたいという、誰もが抱く思いから、彼らは事件にのめりこんでいった。次々に現れる手がかり、抗い難い事件の魅力、近づいたと思えば突き放される挫折。長年にわたる執念の追跡は、やがて彼らから、健康を奪い、キャリアを奪い、平穏な家庭さえも奪っていった——。

謎に触れてしまった者は、真実を“知りたい”という欲望から逃れられなくなる。近づけば引きずり込まれていく迷宮。しかし近づかずにはいられない——それが「ゾディアック」だ。その男は、“ゲーム”を続行するために、いつもどこかで必ず見ている。マスコミは自分をどう伝えたのか。要求は受け入れられたのか。警察はどう動き、どこまで真相に近づいたのか。そして、世の中は自分の所業にどう反応したのか——。それは、おそらくこの映画に関しても例外ではない。その男、ゾディアックが生きているとすれば、彼は間違いなく“そこ”にいる。

その男は実在したのではない、今も実在しているのだ——。